戦時下一布教使の肖像[1]

辻村　志のぶ

はじめに

かつて真宗大谷派宗門で「支那通」と呼ばれた僧侶があった。

岐阜県の大谷派高山別院で生まれ愛知県で幼年から青年期を過ごした彼は，ある出来事をきっかけとして中国へと向かう。三年間を上海東亜同文書院の支那語聴講生として過ごし，その後真宗大谷派中支開教監督（1935），同北京別院輪番 (1937)，同中支南京東本願寺主任兼中南支開教監督部出仕（1939），同上海別院輪番（1941）など宗門内での中国布教に関連する役職を歴任した。そのかたわら，日中仏教の交流に多くの時間を割き，第二回汎太平洋佛教青年会大会中華班長（1934），国際仏教協会（1934），日華仏教学会常務理事（1935），東方仏教協会海外通信部欧米・印度・支那・朝鮮方面担当（1940），日華仏教連盟南京総会理事（1940），中支宗教大同連盟理事（1941）といった活動を行い，1943 年，陸軍刑法事件で特別高等警察に逮捕されるまで，中国大陸での活動と文筆活動を続けた。

彼の名は藤井草宣＜ 1896−1971 ＞という。藤井は現在の伝統仏教による海外布教研究でもしばしば言及される事が多い人物[2]であるが，彼を海外布教史の中に的確に位置づけることは難しい。何故なら，藤井自身が，在外邦人への「布教」と中国人への「布教」の両方を拒絶しているからである。まず彼は当時主流であった日本人居留民への生活指導を布教として認めず，さらに中国人に対する布教を，「無謀」[3]であり，「乃ち，従来ともに支那人が一人だつて日本の十三宗五十八派の何れの信者にもなっているものは無い。」[4]「支那には伝統の長い支那仏教がある。六十萬の僧侶がある。」[5]としてまったく考慮していない。したがって彼は，新しい信者を獲得するべく展開をしなかったのであり，厳密な意味では布教をしてはいない[6]。それでは彼は中国でいったい何をしていたのかという疑問が残る。

彼が中国での活動時間の大半を費やしたのは，中国人僧侶との交流であった。そして藤井はその中で中国人僧侶たちに，日本仏教の現状や真宗の教義，真宗をはじめとする日本人僧侶の信仰生活を語ったが，それは彼らを改宗させようという意図に発したものではなかった。彼の目的は，中国人僧侶を啓発し，彼らの手によって当時逆境にあった中国仏教を復興させようという，壮大かつ不可思議なものであった。

本稿では，海外布教に赴く心性の一事例として，藤井がどのような経過をたどってどのような理由からこのような目的を抱くに至ったのか，その目的が中国での彼の行動にいかに影響したかを，主に藤井の残した文章から，藤井の生涯，とりわけ思想の変遷を，当時の歴史的背景を交えてたどっていくことで明らかにしていきたい。この特異な布教使の歩みをたどる過程で，伝統仏教による海外布教の一端を再構成し，日本仏教にとって中国仏教とは何であったのかという問題にもひとつの解答が得られるだろう。

中国への道程（1）

藤井静宣（号・草宣）は，1896年4月3日に，愛知県碧海郡高岡村，真宗大谷派真浄寺住職で，当時岐阜県高山別院輪番であった藤井至静の長男として生をうけた。静宣は幼年期をこの真浄寺で過ごし，のちに父の任地が変更になったのにともなって，七，八歳のころ愛知県豊橋市にあった浄圓寺に移った。父親である至静は浄圓寺の住持となり，のちに静宣自身も，同寺に籍を置くことになる。

中国へ至るまでの藤井の道程は長い。父の葬儀を済ませてすぐ中外日報社に入社した一年目の彼の関心は，大学在学中に創作を始めた詩歌と，彼自身のエネルギーの矛先を探すことにあった。それが中国に定まる以前，彼は人に「狂犬のようだ」(7)とまで言わしめるほどの攻撃性を剥き出しにした青年であった。藤井をこのように表現したのは無我愛運動で高名な伊藤証信の妻，伊藤朝子であるが，その三ヶ月前の『中外日報』紙上で(8)藤井は伊藤証信の「無我愛」という思想について，釈迦にもなしえなかった愛欲の浄化であり常人には不可能であるとし，さらに「木に竹を接いだような小理屈的な主義」と厳しく批判している。また別の記事では，『懺悔の生活』を出版した西田天香と倉田百三の両者を呼びつけにし，「文化虫類中の蟲種」「虚名文士」と記したことがある(9)。これは一燈園や西田と出版社である宣光社をめぐる金銭問題を取り上げた暴露性の強い文章である。さらに大谷光尊の娘で貴族でもある九條武子が慈善活動で貧民街を訪れたことに関しても(10)，「あんた」と呼びかけ，その行為を「古くさい慈善遊び」「お芝居」であると非難している。

これらの文章を読むと，藤井の激情的な側面と同時に，思想と行動との乖離を厳しく糾弾していること，行動よりも思索を重んじる立場に対して批判的であることがうかがわれる。しかし彼のこの実践を重視する性格が，中国という対象に向けられるようになるのは，石川舜台，水野梅暁との邂逅まで待たなければならなかった。

中国への道程（2）——中国像の形成

石川舜台は明治初期真宗大谷派の宗政家である。台頭と失脚を繰り返した舜台の指示のもとでは，【欧米視察】【翻訳局・編纂局の新設】【北海道・鹿児島開教】【中国・朝鮮開教】【寺務所体制の確立】【学寮改革】【教校設置】【経営活動の開始】など様々な事業が行われ，清沢満之，南条文雄，村上専精らの登用も舜台による教団編成の一環であったといえる。このうち本稿にとってもっとも重要であるのは，【中国・朝鮮開教】である。

さて1923（大正12）年夏，金沢へ中外日報社から派遣された藤井が，舜台の回想録を筆記するために訪れたときには，宗政の表舞台から三度目の引退をした舜台はすでに齢80を越えていたが，まだ健康であり，創刊時から縁の深い『中外』紙上などで意気盛んに著述を発表していた。その舜台との対話を記したものが，「明治仏教秘史　露西亜布教の手先き（ママ）に西蔵蒙古の仏教を使ひ支那王室を乗りとる算段——今一息で事瓦解　見真大師号下賜の秘史」(11)である。副題からもわかるように，舜台が企図した【中国・朝鮮開教】について述べたものであるが，その内容は中国に寄せる粗雑なイメージに基づく荒唐無稽なものである。

それによれば，舜台が海外布教を検討し始めたのは外遊から帰国してすぐのことである。「（注：外遊の手配を援助していた江藤新平が下野したのに代わり）大久保利通と話し込んで，これから先は，

日本にばかりいると，外教が入るばかりじゃ。それでこれは攻めるをもって防御せねばならぬ。（傍点原文ママ）その手始めは露西亜からする。露西亜が一番いかん，これは隣国じゃ」。

このような危機感に沿って，まず西蔵仏教との連合が図られ，それを通じてロシア布教を開始するというのが舜台の考えであった。しかし，西蔵仏教との連携の第一歩として，北京のラマ宗僧侶に近づく予定であった真宗僧侶，小栗栖香頂(12)が北京で寺廟を買い受ける約束をしたために，中国仏教に近づき，さらに中国皇室と関係を結ぶことを考慮するようになった(13)ために，ロシア布教のために西蔵仏教に接近する目的がやがて中国布教にすり替わり，副題のような話として展開したのである。

ここに見られるのは，隣国であり日本に脅威を与えている西洋であるロシアに対する対抗手段としての仏教という捉え方と，同様に手段として利用される対象としての中国像である。このような＜西洋＞に対峙する＜東洋＞の団結軸としての仏教と，東洋諸国の仏教の中でわけてもリーダーシップを発揮すべき日本仏教，という構図は，日本的仏教大アジア主義(14)として後の世代に受け継がれて行くものである。藤井も，舜台の西洋観や中国観に対して異を唱えたわけではない。ここまでの彼にとって，中国とは明治時代の仏教大アジア主義者らによる活劇の舞台でしかなかったといえよう。

しかし，藤井が舜台から得たものは，仏教大アジア主義的思考だけではない。それは森龍吉が「開かれた真宗」(15)と名付けたものであり，寺に籠もらない仏教のあり方という理想像であった。舜台は門徒に経済的依存をしない寺院経営を目指し，鉱山の開発や経営事業に乗り出した。また南条文雄らの留学生をヨーロッパに送り，原典仏教の研究に努めた。中国布教をめぐる顛末からもうかがわれるように舜台の構想は破天荒といってもよいほど衝動的側面が強く，施策はいずれも紆余曲折をたどり，破綻したものも少なくなく，宗門の内外からの反発も大きかった。だが，その発想と行動力は藤井の関心を引き，以後しばしば肯定的な形で舜台に言及するようになる(16)。舜台の死後に寄せた文章で，藤井は舜台を「百年二百年後を目標とした達人」(17)と呼び，また舜台の宗政の後を受けた渥美契縁が，真宗大谷派門徒の総力を挙げて伽藍を再建させたことに比して，「…（舜台が）何を遺したか。遺したものは『大理想』である。」(18)としている。

転換点

実際にはついに中国を訪れたこともなかった舜台以上に，藤井の中国像形成に最も大きく寄与し，彼の人生に深い影響を与えた人物として挙げられるのは，水野梅暁＜1878～1949＞である。彼らが出会うのは，藤井が舜台と面会した年の九月に起きた関東大震災を契機としている。藤井は震災から六日後，中外日報東京支社の社員として被災地を見て歩き，その悲惨な状況をつぶさに報告した(19)。藤井はこの震災による被害を目の当たりにして，自らの一族が滅ぼされたときに，すべては業であると嘆いたという釈尊の物語を想起する(20)。そしてその業報を受けて新しい生を生きなおすことを考え始める。

> …これらの語（注：「すべては業である」「わが頭痛む」という釈尊の言葉）は一寸考へると恐ろしく薄情のやうである。少しも感情のない余りに冷静な言ひ方のやうである。然し乍ら仏教はその本体を見極めるとこういう冷たい智慧に根ざしている。これは真理であるから仕方がない真理をいかにごまかさうとしてもごまかせぬ。真理をごまかせば迷ひであ

る。迷うている者が救はれるには一度こういう冷たい真理に行き会ってヒヤリとせねば目が覚めぬ。この覚めるといふ事が即ち文字そのままに覚りである。覚りて再び迷はざることは即ち仏になることである。…(21)

その意志の現れが，震災の翌年九月一日に浅草本願寺で行われた復興局主催による震災一周年の式典で募集された精神復興ポスター標語に応募した藤井の，「震災で死んだつもりで働かう」という言葉である。彼はこの標語で一等賞を獲得する。

中国への道（3）——中国人僧侶との対面

この日，会場には中国人罹災者の慰霊のために東京・横浜在住の華僑連合会から招かれた中国人僧侶の一行三十名ほどが来ていた(22)。彼らは主に普陀山の僧侶たちからなっており，団体名を「仏教普済日災会」といった。そして彼らに同道し，式典の後に設けられた歓迎会の席で中国語の通訳を行った日本人僧侶，水野梅暁がいた。同席していた浄土宗僧侶で渡辺海旭(23)は藤井に，「僕は英語も独逸語も多少はやって用を弁ずるが，最も近い隣国の支那語の研究を怠っていた。支那の仏教がこれほど盛んであることを忘れていたのは残念であった」「支那語は水野君一人しかやっておらんのだった」(24)と話したという。この言葉に強烈な印象を受けた藤井は，この先多年にわたって水野を先達として仰ぐことになる。

曹洞宗僧侶(25)，水野梅暁を中国へと赴かしめたものも，石川舜台の場合と同様に＜西洋＞に対する＜東洋＞の結束への試みであった。彼自身の手になる文章によれば(26)，1900 年（明治 33）に起きた義和団事件がその契機となっている。彼はこの事件を，欧米の宣教師たちにキリスト教を強制されたことへの中国民衆の反発と，清朝の政治的な腐敗が相互作用をもたらしたものであると断じ，「風俗，習慣，文学，言語を異にせる宗教を強制されたる結果がかかる非合法的の暴挙を演じて，自らその身を亡し，かつ祖国には拭うべからざる不名誉と実害を与え」(27)たと評している。

そして「俎上の肉」(28)として列強，さらには日本にも割譲されてしまった中国の状態を，「対岸の火災視するを得」(29)なかった水野は 1901 年（明治 34），上海東亜同文書院に院長として赴任する根津一の書生という資格で中国に渡り，やがて第一期生として名を連ねることになった。同文書院で水野は中国語，アラビア語をはじめ，仏教や道教に関する中国古典の研究を行った(30)。その後卒業を待たず曹洞宗布教使として東北部で活動を始めた水野は，中国人僧侶や居士との交流を経て，現地に僧侶教育機関を建てるなどの活動を行った。また中国政治にも関心を持ち，多くの政治家，例えば孫文などとも親交があった(31)。

水野に特徴的に見られるのは，まずその経歴にも見られるように徹底した現場主義である。1924 年に水野と面会し，中国研究を志願する旨を伝えた青年は「若し貴君が中国研究を以て終生の事業とするならば，かかる浮薄なる支那浪人的態度を倣うことなく，先ず中国古典の研究と，中国語の学習という，中国研究家としての基礎的な教養を身に付けることに努力しなければならぬ。」といったと伝えられている(32)。最初に古典と語学を学習せよ，というのは後進に対する水野のいつもながらのアドバイスである。

次に，その行動範囲，対人関係の広さである。例えば 1911 年，辛亥革命に際してすでに多くの死者が出ていた南京近郊に，臨時野戦病院を開設した。その資金は本派本願寺によって負担さ

れ，日本から現地に店舗を構えていた各商社，現地機関がこれを支援した(33)。野戦病院には革命軍・清軍両方の死傷者が収容され，その「義挙」は革命軍現地司令官に大いに感謝されている。当然といえば当然であるが，水野の「義挙」には，それなりの思惑がある。1911年12月に南京が陥落すると水野は，後日南京臨時政府で法制局長官となる宋教仁と会談の席を持ち，日本人僧侶の権利拡大，日本寺院の設立許可を要請する。当時まだ日本仏教は清国での布教権を持たず，そのため日本人僧侶らの活動にはさまざまな制限がつきまとっていた。水野の教育事業があまりこれといった結実を生まなかったのにも，中国官憲の動きを察した中国人僧侶らが警戒したという事情があった。そこで水野は，日本での布教権獲得運動の結果を待たずに独自の手段をとろうとしたのである。

しかし，翌1912年1月に孫文が初代臨時大統領に就任したばかりの臨時政府は，袁世凱との水面下の駆け引きなどで混乱しており，水野の要望を実現するどころではなかったと思われる。水野が日本人僧侶の自由な活動許可を掛け合った宋教仁も，後には暗殺されてしまう。しかし水野と国民党勢力との関係は続き，袁世凱が中華民国大総統となり，1913年，国民党側が第二次革命に敗北すると，水野は彼らの日本亡命を助け，日本滞在中も彼らにしばしば援助を行ったという(34)。その一方で，水野は北洋軍閥の長老であった段祺瑞とも接近している。1927年に藤井草宣が大連で段祺瑞に面会している(35)のも，水野の紹介あってのことであった。水野は，政治立場の相違に拘泥せず，中国政界の要人たちと面識を持ち，日本仏教の中国における活動のためには必要に応じて彼らに提案や要求を行うことがあったものだと思われる。

水野の持つ実践性，時には布教という目的のためならばそのための最上の相手を選んで交渉する辣腕ぶりを藤井は「…由来仏教界の人物は，常に対内的には多少役に立つとも，対外国際的には，水野氏の如き人物は極めて少ない。しかして君の如く睨みも利き，押しも通る摩訶不思議な力を持っている者は一人もないのである。」(36)と賞賛している。水野に見られる，布教に役立つのであれば提携する相手を選ばないことにもなりかねない熱心さは，ややもすれば布教される側を見失ってしまう危険があったが，水野本人の＜西洋＞に対する危機感が，そこを見えなくさせてしまっていたといえよう。そしてまったく同じことが，藤井をはじめとする他の布教使たちにも当てはまる。しかし，1925年東京で開催された東亜仏教大会において水野の秘書役を務め，いよいよ中国仏教と中国人僧侶への関心を高めていった藤井にとって，「支那人のことは支那人に解決せしむべし」(37)という水野の言葉は容易に守りうると思われていたのである。

東亜仏教大会は1925年（大正14）11月1日からの三日間，日華仏教連合会の主催で芝の増上寺で開催された(38)。中国からは太虚ら二十七名の僧侶と居士および関係者，朝鮮から総督府の人員を入れて八名，台湾からは通訳一名を入れて四名が参加した。開会式は，仏教連合会会長の佐伯常胤による「…抑々世界の文化は，物質文明に就いては，欧米が最も長じて居りまして，吾人東洋人は之に一等を輸せねばなりませぬが，精神文明に至りては，彼等の企て及ばざる雄大な内容をもつて居るのは，吾等東洋人であります。」(39)という言葉で始まっている。＜西洋＞対＜東洋＞。＜物質文明＞対＜精神文明＞という構図がここにも表れている。後の講演で中国人僧侶の一人も同種の発言をしているところから見ると，この対立構造は仏教者に広く共有されていたものであろう。さらに，大会の柱が「教義研究」「教義宣伝」「社会事業」「教育事業」の四つであったことからは，これらを通じて仏教の振興をはかろうという意志も彼らに共有されていたの

だということができる。

さて大会開催第一日目には総会，第二日目には各部会を行い，第三日目は再び総会があり，終了後は外国人僧侶らの観光という日程になっていた。この大会で藤井は，日華仏教連合団連絡員であった水野梅暁の秘書として会議の運営に携わり，閉会後には水野らと共に中国仏教徒を大学や博物館，工場などへ同道し，彼らと直接の面識をもつようになる。

中国での活動（1）

大会から一年後の 1926 年，藤井は友人を伴って中国大陸を訪れる。これが彼の最初の中国訪問である。旅程は二ヶ月弱におよぶもので，大連，旅順，長春，吉林などを訪れて，東亜佛教大会で知り合った中国人僧侶らと再会している。この間に藤井が仏教復興に熱意を燃やす中国人僧侶らから受けた刺激は少なくなかった。彼は居士らの仏教研究団体である三時学会に参加し(40)，上海では太虚を訪ねて東亜仏教大会後の活動の様子を聞いている(41)。しかし，藤井がそこで感じたものは，中国人仏教徒の理想と実像が大きくかけ離れているということでもあった。

例えば太虚との談話中に表れたものでは，政変によって活動停止を余儀なくされた教育，社会事業などの国内での活動に変わって西欧へ布教に向かう，という太虚の計画には経済的困難があり，日本仏教界からの援助が必要になるかも知れないこと，設立途中の仏教図書館には中国語の研究書よりも日本語の研究書が多いので，さらに仏教研究書の寄贈が必須であること，東亜仏教大会で話し合われた日中仏教合同による病院の創設には，日本の医術，医師，薬をぜひ提供するべきこと，などである。太虚との対話について，藤井はそのまま『中外』に書き送ったが，一方で彼個人の心境は次のように記されている。

> 「何故に先づ自ら始めざる」といいたいところだつた。（筆者略）彼らは日本人を利用せんと考ふると共に之に頼らんとも考へつつあり。仏法のために愚者となりて利用されても之可也(42)。

この時点での藤井にとって，東亜仏教大会での四つの目標である「教義研究」「教義宣伝」「社会事業」「教育事業」に対する試みがいずれも途上にあり，日本仏教に比べて経済的にも学術的にもはるかに劣位にある中国仏教の現状はもどかしく感じられるものであった。その態度が変化を遂げるのは留学を経てからである。

藤井は旅の前後，および旅び最中に見聞したことをさまざまな場所に投稿していたが，帰国後にそれを一括して『仏教日本の自覚』[1927] としてまとめて出版する。それは藤井が本格的に中国に関わる前にやっておかねばならないことでもあった。そして 1928 年，藤井は水野梅暁の推薦で上海の東亜同文書院に支那語聴講生として入学し，上海の世界仏教居士林で多数の中国人僧侶らと寝起きを共にしていた(43)。

留学中に藤井は，清朝末期から盛んになっていた中国での廟産興学運動について，新聞や雑誌，政府発行の資料などを収集し，帰国後の 1931 年，『支那最近之宗教迫害事情』（以下『迫害』）と題した一冊の本にまとめて自費出版する。『迫害』は，もともと藤井が持っていた構想では『黎明来たらむとする支那の現代佛教』なる本の一章「思想界の対宗教態度と政府の宗教政策」にあたるに過ぎないものであったが，独立した一冊として発刊することになった(44)。本の構成は四つに分かれており，第一部「僧閥打破運動之急突撃」，および第二部「国民政府之宗教取締法」で，

1928年に始まる廟産興学運動の一連の流れを追っている。『迫害』の第三部「第二次運動宣言並駁斥」には，寺廟を学校にすることでどのような利益が得られるかについて書かれた「廟産興学促進会宣言」と，翌1931年（民国20・昭和6）12月，王一亭ら有力居士が発表した「廟産興学促進会宣言駁議」が掲載されている。残る第四部は，「全国的受難及対策月報」と題され，1928年2月から1931年8月までの約三年半におよぶ，政府による仏教関連の法令，中国仏教の被害と，僧侶らの対抗策の記録である。これらの作業を通じて藤井は，中国において仏教が振興するということの困難をより身近に感じることになる。

中国での活動（2）

しかし，藤井の中国への熱意が次第に高まっていったのとは対照的に，日本と中国の関係がますます悪化するにつれて，日本仏教界では中国仏教への評価は低下していった。例えば満州事変の起きた1931年（昭和6）に，仙台で開かれた仏教大会では，一僧侶が「支那仏教徒問責決議案」を提出している(45)。さらに1932年（昭和7）1月18日，日本人僧侶らが上海市内を行脚している最中に，陸軍の教唆を受けた中国三友実業社の従業員らによって襲撃され，死傷者が出るという事件が起こった。これを知った上海に居留中の日本人の一団は，報復措置をとることに決め，翌々日20日に三友実業社に放火し，以前から芳しくなかった上海での日中関係は著しく悪化した。さらに，この襲撃事件を契機に日本海軍陸戦隊が上海に軍事侵攻を開始，第一次上海事変となった。この事件に対し，日本仏教界から中国民衆の宗教的なものに対する崇敬心の薄さ，ひいては抗日運動への中国人僧侶の無力に非難の声が集まった。『中外日報』社説では，日本人僧侶と提携し，日中両国の和平に貢献していかねばならない中国人僧侶らが，みすみす自分たちの領域である上海で，日本人仏教者に対する暴力事件が起きるのを看過してしまったのは怠慢であると述べた(46)。

これらの動きに対して藤井は，「此際日支佛教提携し和平運動を誘発せよ」（上・中・下）(47)という文章を持って抗弁する。中国仏教徒は社会的活動を好まず，なんらの政治的権限を持っていないこと，したがって彼らの政治的責任を追及するのは「的ちがい」(48)であると述べる。この反論がどれほど受け入れられたかは不明であるが，その後も藤井は，抗日戦線が拡大して行くにつれて，中国人僧侶らのなかにも抗日運動へ身を投ずるものがあらわれて日本仏教界の反感を集め，それが「排日支那僧」批判として形をなしてくると，藤井は中国人僧侶らの活動が「偽装排日」である可能性を示唆する。その言葉には，抗日団体が勢力を持っていること，また国民党政府と友好的な関係を保つことは中国人僧侶らにとっても肝要であることを考えあわせれば，「個人の生命財産の不安なること到底日本では想像の出来ない支那人が常に多角面の生活態度をとるのは当然である」(49)といった説明が付されている。それが非常に突飛な発想であることは否めないが，彼の主張は変わらなかった。いったい何が彼をそこまでして中国仏教との交流に執着せしめたのであろうか。

中国での活動（3）

その問いにひとつの答えを与えるのが，藤井の次のような一文である。

…（注：中国人僧侶の抗日気運を認め）しかしながら純粋学術上のことになると，『海潮音』（筆者注：太虚が開設した武昌仏学院発行の仏教雑誌）誌には毎号必ず何か日本仏教学

者の論文の翻訳を載せている。そして漸次，日本仏教の研究方面と歩調を合わせて行こうと努めている。…彼らの態度は，純学術に立ち籠もるとき，日支の国際情勢の悪化なぞは一向問題にならないのが通例である。…（筆者注：中国人留学生の増加に触れ）今は人材を造る最も大切なときである。彼ら留学生の志を円満に遂げさせてあげてほしい。(50)

ここに見られる【仏典研究】【僧侶教育】こそ，藤井が中国仏教との交渉にこだわった理由であった。藤井の二つの論考，「現下の支那仏教界の情勢」(51)と「福建佛教の新舊両派」(52)の二編には，彼が中国仏教に何を希望していたのかが表れている。

まず「現下の支那仏教界の情勢」は，鈴木大拙ら中国仏教史跡見学の一団に随行して中国各地を回って帰国した後，1934年（昭和9）9月に書かれたもので，廟産興学運動が一段落したあとの中国仏教を紹介したものである。内容は「1．宗教の再興　2．伽藍の復活　3．人材の輩出　4．仏書の盛行　5．新旧の対立」と五つの部分に分かれており，それぞれ日付や人名などを列挙した細かいものになっている。「1．宗教の再興」では，国民党政府の官僚が宗教に寛大であることが報告されている。文中で藤井は，その年の6月に偶然法会で一堂に会した当時の国民党政府行政院長，汪兆銘が自ら，「国民党政府としては，宗教信仰の自由を認めているから，宗教に対してはいっさいの禁止立てはしない。それと同時に，民間において民衆が宗教に対して種々の批評をしてもそれを禁止することもしない」と語ったという。そして藤井はこれを中国国民党政府の宗教解放的政策であるとして評価し，同時にラマ教やイスラム教の保護は，国民党政府の安定にも貢献するところ大であろうとしている。

続く「2．伽藍の復活」は，文字通り中国の伽藍の様子を書いたものであるが，その中で特に注意を払うべきこととして，中国仏教の新動向に触れている。具体的に挙げられているのは，洪水の被災地に寄付を行ったことであり，一部の僧侶が監獄教誨説教を実行し，また釈放者保護事業を企画していることであり，上海慈幼院（筆者注：児童保護施設）の設置である。これらは「（筆者注：北京龍泉寺孤児院，上海疾病院などの）社会事業とともに，現代支那佛教の一特徴である。」とされている。また居士を中心として新しい形式の道場である居士林が盛んになってきたとし，その多くが「施薬施療等の救済事業，小学校，講習会の如き布教的事業を行」っていることを記している。

ここから，藤井が中国仏教によるさまざまな社会事業を，これまでに見られなかったこととして肯定的に捉え，位置づけていることがわかる。さらに「3．人材の輩出」は，「近世以来，支那佛教は，道教とともに「僧道」として政府より取り扱われ，社会的には「方外」として何らの地位を認められず，常に山林に隠棲して修行する者なりと断定されていたのである。」と始まり，そのような状況下で太虚やその一派といった「革新の気運」が芽生えている，と評している。藤井が彼らをより開明的な，進歩的な僧侶として評価していることは確かである。

一方の「福建佛教の新舊両派」は，「現下…」の発表から二年後の1936年（昭和11）1月に書かれた文章である。内容は，福建省で彼が厚誼を持っている新派と，その対抗勢力である旧派を比較対照的に取り上げて日本仏教界向けに紹介したものである。そこから藤井が新派のどの点を評価し，旧派のどのような点を批判しているのかを見ることで，彼の「あるべき中国仏教像」をよりはっきりと知ることができる。

本文はまず福建省の仏教を，廈門を中心とした新派「学僧仏教」と福州を中心とした旧派「伽藍仏教」とに区別するところからはじまっている。このうち旧派についても，避暑ホテルを経営し，そこから上がる収入を財源として利用しているところ，および慈善団体を二三十持ち，貧苦に苦しむ人々に奉仕しているところを「新仏教の形態がある」と認めている。問題になるのは，僧侶教育と仏教の新研究に不熱心であるという点である。

具体的に触れられている旧派仏教とは，福州の鼓山・怡山である。藤井はその歴史性や威容に感心しながらも，鼓山佛学院に学生が二十名前後しかいないことを指摘し，清朝のころには数千人もいたということと比較し，発展は期待できないとしている。

ここで注意を払わなければならないことは，藤井が挙げる理想的な中国仏教の条件である。それをいくつかに分けるならば，【経済的自立】【社会事業への参加】【僧侶教育】【仏教研究の充実】となり，このうち藤井にもっとも重視され，評価の甲乙を分ける基準になっているのが三番目，四番目の【僧侶教育】【仏教研究の充実】となる。藤井が中国仏教に期待しているのは，この四つを満たした仏教なのである。

そして，藤井にとってそれは当然日本仏教がすでに果たしたはずである仏教の「近代化」であった。石川舜台の施策に藤井はすでにそれを見て取っていた。水野はそれを中国仏教に移植しようと試みた。藤井は，その後継者として中国仏教との接触を図った。藤井にしてみれば，中国仏教の現状は日本仏教に比すべきなのであり，そのためには何をおいても日本仏教の手助けが必要なのである。しかし，結論から先にいえば，彼の意図はまったく受け入れられることがなかった。

中国での活動（4）

中国と日本が交戦状態にはいり，戦闘が激化してゆくにつれて，藤井は中国仏教改革への熱意と日本への忠誠の間に矛盾を呈していく。日本仏教と中国仏教の交渉に戦争が影を落とすことを恐れた彼は，曖昧な言葉ながら日本の戦争を道義的に批判しようと努めた時期もあった(53)が，やがて肥大化した矛盾を軽減するために，国家間の交戦と仏教間の交流を分割しようと試みるようになった。

> 日支の関係は國際的には大いなる悲運に際会している。然し両国の佛教徒は，之を問題とせず，佛教の世界的展開運動の為め，その人材養成の目的を以て相提携協力し，新人の前途をして光明あらしめねばならぬ責務があるのである。(54)

とはいえ，このような回避がいつまでも有効であるわけもなく，ひとたび国家が藤井の人脈や彼自身を，日中仏教交流の認可と引き替えに文化工作として利用しようとしたとき，彼に抗う理由はなくなってしまった。特務部と接触し，彼らが中国仏教と日本仏教の交渉を妨害する意図が無く，さらに中国仏教の復興に関心を持っているという確証を得た1937年以降，彼の陸軍特務機関や南京政府への傾斜は著しくなっていく。そして1943年に不敬罪で逮捕され活動を停止するまで，日中仏教交渉の第一線で活動したのである。

終わりに

藤井をここまで駆り立てた日本仏教の指導による中国仏教の復興という幻は，「仏教」という一点において共通しているという理由から，日本仏教が中国仏教を自らの似姿としてしか捉える

ことができなかったことから生じたものである。日本仏教と中国仏教はそれぞれに互いが同じ仏教であるというカテゴリーに属しているという過信があった。したがって，日本仏教は中国仏教を，同じように発展しているはずのものが遅れていると見なしたのであり，一方で中国仏教は日本仏教を，出世の本質を忘れた異端であると見なして軽侮の念を抱いたであろうことは想像に難くない。

日本仏教側についていえば，そのような優越感は，国民国家の成立と展開と同調し，他民族に対する日本民族の優越，非仏教者に対する仏教者の優越と相まって，強化されこそすれ弱まることはなかったのである。そして，日本仏教側のそのような姿勢は中国仏教側にも通じ，日本仏教が布教活動を行っている間，相互の交渉は藤井のような少数の例外を除いてほとんど持たれなかった。日本仏教は廟産興学運動に現れるような中国仏教を取り巻く情況を，明治期の日本仏教を襲った廃仏毀釈などと同一視し，日本仏教がすでに乗り越えた試練に未だ苦しんでいる中国仏教，と捉えて憐憫と軽侮の情を抱いたのである。そこでは，中国と日本という別個の空間で展開した，それぞれ現在も未来も異なる形の仏教への想像力があまりにも欠けていたと言わざるをえない。

つまり，「近代化」を遂げた日本仏教によって中国仏教の「後進性」が発見されたのである。ここには，藤井が考えたような理想的提携が結ばれる余地はない。しかし，彼は日本仏教の優越感と日本人としての優越感を振り切ることができなかった。

「日本」の枠を踏み出ることができない日本仏教のあり方は，「仏教はなぜ社会的存在でなければならないか？」そして「仏教にとって社会とは，国家とは何か？」というこの二つの問いを建てる暇もなく自己形成せねばならなかったという近代国民国家の成立に関わる状況が大きく影響していると思われる。

「国家」を離れての個人的提携，宗教上の友好関係がいかにもろいものであるかは，藤井がすでに証明したところである。というよりも，はたして「国家」を離れた宗教と宗教との関係が構築できるのか，という彼の残した疑問こそが，日本仏教の，また中国仏教の，そしてそれ以外のわれわれの課題であるといえるだろう。

藤井草宣年譜　（◇著作リスト）
藤井静宣（号・草宣）明治 29（1896）～昭和 46 年 (1971)
筆名：葱嶺迂人，八萬四千峯外史，善財童子，雑苦罵乱，鬼剣，花園古刹，等々
経歴（1915～1943）

1915（大正 4）	歌集『若き日の詠嘆』
	真宗大谷大学に進学
1920（大正 9）	第一歌集『燃ゆる愛欲』刊
1922（大正 11）	真宗大谷大学専修科卒業
	中外日報入社，東京特派員となる
1923（大正 12）	関東大震災
1924（大正 13）	中外日報退社『教友新聞』を興し主筆を勤める（大正 13,5～14, 夏）
	関東大震災一周年式典。「仏教普済日災会」の中国人僧侶らと会う
1925（大正 14）	水野梅暁の秘書として東亜佛教大会に参加
1926（大正 15）	「東方佛教」編集「日本佛教年鑑」編集に携わる
	『日本宗教大講座』編集

雑誌『現代仏教』事務部
「学会総覧」担当（欠：昭和2年7月～9月）（～昭和3年9月）
◇1926「東方佛教の世界的ニュース」『東方佛教』1号（5月）
◇1926「『法城を護る人々』の主観」『東方佛教』2号（6月）
◇1926「梁啓超氏の「大乗起信論考證」」『東方佛教』5号（9月）
◇1926「佛教は意外の方向に進展す」『東方佛教』7号（11月）

1927（昭和2）　（5,6月）笠木良明と満支旅行。奉天・大連・上海等をまわる
（8月）『佛教日本の自覚』出版
◇1927「中華尋経記」『現代仏教』4巻40号（8月）
◇1927「満州宗教雑記」『東方佛教』17号（9月）
◇1927「鎌倉での思ひ出」『現代仏教』4巻41号（9月）

1928（昭和3）　外務省から上海東亜同文書院へ派遣，東本願寺からでは五番目で最後の留学生であった。同所で支那語聴講生として，1931（昭和6）10月まで在籍
◇1928「對支佛教運動の推移—明治大正五十年を経て大転換期来る」『現代佛教』5巻46号（2月）
◇1928「寶の島より」『現代仏教』5巻49号（5月）

1930（昭和5）　（1月）蘇州を訪れる

1931（昭和6）　（6月）上海滞在
『支那最近宗教迫害事情』出版
◇1931「上海便り」『現代仏教』8巻84号（8月）
◇1931「最近国民政府の發布した宗教法令」『現代仏教』8巻86号（11月）

1932（昭和7）　上海事変勃発直前に上海を離れる

1933（昭和8）　地元で過ごす
◇1933「今様諧謔歌」『現代佛教』10巻102号（3月）
◇1933「舎利はふえる」『現代仏教』10巻103号（4月）
◇1933「石川舜台を想ふ」『現代佛教』10巻105号（7月）

1934（昭和9）　（5～6月）鈴木大拙らの支那佛教史跡見学旅行団に同行して渡支。
上海・杭州・寧浦・南京・天津・青島・北京を巡る
北京で一行と別れ，再び上海に行き，上海から長江づたいに漢口，武昌へ。
第二回汎太平洋佛教青年会大会の中華班長をつとめる（開催地/東京・京都・大阪）
（12月）広東・福州
日華学会にて日華佛教研究会創立の申し合わせ（後日華佛教学会に改称）
国際佛教協会理事
◇1934「全支那に漲る密教重興」『佛教思想』9巻3号（2月）
◇1934「現下の支那佛教界の情勢」『海外佛教事情』1巻3号（9月）

1935（昭和10）　中支開教監督
（7月）日華佛教学会＜別称：中日佛教学会＞発会
（10月末～翌年2月）南支および台湾佛教事情観察。台湾，広東，香港，福州，上海，南京へ。
（11月）5日，台湾佛教徒大会出席。この月『真宗十講』の出版に携わる
日華佛教学会常務理事に
日華旅行社顧問
◇1935「僧傳より見たる清代佛教」『現代佛教』12巻126—127号（1011月）
◇1935「清廷と佛教殊に臨済宗」『大谷學報』16巻3号（10月）

1936（昭和11）　（2月）南支視察後，上海東本願寺へ。「第一回通俗学術講演」として毎日ホールで講演。15日帰国
『上海開教六十年史』明治6～38年末分までを執筆
◇1936「四段階を経たる日華佛教交渉史断片」『日華佛教』1巻1号（1月）
◇1936「転換期に臨める台湾佛教の現状」『日華佛教』1巻2号（2月）

◇1936「人物評伝／印光法師小伝」『日華佛教』1巻3号（3月）
◇1936「南普陀と　南佛学院」『日華佛教』1巻4号（4月）
◇1936「福建佛教の新舊両派」『海外佛教事情』3巻5号（5月）
◇1936「広東仏教の特殊的展開」『国際佛教通報』3巻10号（5月）
◇1936「支那佛教徒の對日態度に就いて」『海外佛教事情』3巻10号（11月）

1937（昭和12）　（5月）大醍法師訪日，一ヶ月半同道
（7月）北平へ。北京別院輪番を勤める

1938（昭和13）　（4月）中支宗教大同連盟発足
（9月）北京覚生女子学校創立に携わる
（10-11月）愛知県の自坊にて休養
（12月）上海，蘇州，南京へ

1939（昭和14）　（5月）中支南京東本願寺主任兼中南支開教監督部出仕として渡支
（8月）南京滞在

1940（昭和15）　（5月）上京
（10-12月）蘇州および南京へ
日華佛教連盟南京総会理事長を務める
東方佛教協会海外通信部で欧米・印度・支那・朝鮮方面を担当

1941（昭和16）　中支宗教大同連盟理事
（5月）27代目上海別院輪番をつとめる（～18年）

1943（昭和18）　帰国。陸軍刑法事件で特別高等警察に逮捕される

『中外日報』本稿関連記事（更新中）
（参照：槻木瑞生1998「中外日報」紙のアジア関係記事目録）
『同朋大学佛教文化研究所紀要』17）

1922	01	11	「怪聖岡田播陽論」(一)	草宣 (社員)
		12	同上 (二)	草宣 (社員)
		13	同上 (三)	草宣 (社員)
		14	同上 (四)	草宣 (社員)
		26	「現下宗教界の二典型」	草宣 (社員)
		27	「私の心境 (日野, 伊藤, 西田, 倉田, 岡田諸氏に教えを乞う)」(上)	草宣 (社員)
		31	同上 (下)	草宣 (社員)
	04	29	「暁烏氏と草宣氏にお会いして」(上)	伊藤朝子
	05	02	同上 (中)	伊藤朝子
			同上 (下)	伊藤朝子
?	?	?	六千八百三号「思想文芸界の趨勢を論ず」	草宣 (社員)
	08	18	「長谷川如足閑氏の宗教観を聞く」(一)	草宣 (社員)
		19	同上 (二)	草宣 (社員)
		20	同上 (三)	草宣 (社員)
		22	同上 (四)	草宣 (社員)
	09	20	「都市計画と寺院」	草宣 (社員)
	11	08	「古臭い慈善遊びをした九條武子さんに注告する」	草宣 (社員)
		10	「原告とその弟子, 天香氏が裁判になるまで一燈園の破裂」(一)	草宣 (社員)
		16	同上 (二)	草宣 (社員)
		18	同上 (三)	草宣 (社員)
	12	09	「抵抗力なき現代学生」(下)	草宣 (社員)
1923	01	15	発刊七千号記念「本社の肉となり骨となった殉職社員の憶出」	草宣 (社員)
	03	21	「明治仏教秘史」(一) 支那編	草宣 (社員)

		22	(二)	草宣 (社員)
		24	(三)	草宣 (社員)
		25	(四) 朝鮮編	草宣 (社員)
	04	10	「雑苦罵乱」(上) 大谷家について	草宣 (社員)
		19	(二) 水平社の発展について	草宣 (社員)
		21	(三) 宗門とご宗議解散方法	草宣 (社員)
	08	20	「身の程知らぬ著述家が多すぎる」	草宣 (社員)
		21	「法城を破る人々」(一)	草宣 (社員)
			同上 (二)	草宣 (社員)
	09	13	「社旗を肩にして焼野の原を歩く」	草宣 (社員)
	10	30	「万歳の叫ばれる色々な場合 (上)」	草宣 (社員)
		31	同上 (下)	草宣 (社員)
	11	06	「銭呉れ本願寺石川舜台翁談」	草宣 (社員)
	12	08	「多田・金子両氏間の宗義問題について曽我量深氏談」	不明
		16	「宗義問題傍評」	井上右近
		21	「井上右近に興ふ」	草宣 (社員)
		28	「藤井草宣兄に答う」	井上右近
1925	09	17	「民族の心に触るる道—回教研究者の出現」(上)	草宣
		19	「真如法親王の殉教地に記念碑樹立は可能なり」	草宣
		20	「民族の心」(下)	草宣
1926	04	09	「争闘は日本仏教俗諦門の極地なり」(上)	草宣
		10	同上 (下)	草宣
	08	12	「亜細亜民族大会の意義 (上)—「中外」社説の非を一言す」	草宣
		13	同上 (下)	草宣
		15	藤井草宣氏の非を一言す	不明
1927	05	31	「班禅ラマ会見記 (上) 奉天黄寺にて」	草宣
	06	01	同上 (中)	草宣
	06	03	同上 (下)	草宣
	06	04	「大連市外星ヶ浦に前執政段祺瑞氏を訪ふ (上) 大連にて」	草宣
		05	同上 (中)	草宣
		07	同上 (下)	草宣
		25	「北京に勃興せる三時学会を観る (一) 三時学会に宿りて」	草宣
		26	同上 (二)	草宣
		28	同上 (三)	草宣
		30	同上 (四)	草宣
	07	10	「鉄鋼の上海に勇躍せる太虚法師の一派」(一)	草宣
		12	同上 (二)	草宣
		13	同上 (三)	草宣
		14	同上 (四)	草宣
		15	同上 (五)	草宣
1931	07	22	「支那訳された日本仏教徒の著述」(上)	草宣
		23	同上 (中)	草宣
		24	同上 (下)	草宣
1932	01	30	「騙術・武力・実力 (上)—日支問題について—上海より帰港の日」	草宣
		31	同上 (中)	草宣
	02	02	同上 (下)	草宣
		04	「六朝仏に添えて」	草宣

		15	「此際日支仏教徒提携し和平運動を誘発せよ」	草宣
		16	同上 (中)	草宣
		17	同上 (下)	草宣
	12	12	「石川舜台翁自叙伝」	不明
1933	01	01	「屯田僧の行衛」	草宣
	06	24	「近世支那僧の行持生活 (一)」	草宣
	06	29	同上 (二)	草宣
		30	同上 (三)	草宣
	07	01	同上 (四)	草宣
	08	08	「上海で暗殺された玉観彬居士を思ふ (上)」	草宣
		09	同上 (下)	草宣
		22	「奉天で急逝した奇僧向出哲堂物語 (一)	
		24	同上 (二)	草宣
		25	同上 (三)	草宣
	09	28	「来るべき亜細亜の危機に備ふる日支青年の個人的提携を提唱す」	草宣
	10	08	「藤井草宣氏に呈す」	村上素道
		14	「日支青年の個々的結合について村上素道師に答ふ」	草宣
		21	「支那, 満州僧侶のため奉天に仏教中学を設けよ」	草宣
	12	03	「開教第一線の新人 (上) 北支に井上・南支に神田」	草宣
		07	同上 (下)	草宣
1934	02	22	「汎太平洋仏教大会に支那代表の欠席—藤井草宣氏勧説に渡航か—」	不明
	03	13	「愚衆・識者・満州帝国」	草宣
	05	06	「支那仏教徒招待に就いて」(上)	草宣
		08	同上 (下)	草宣
	06	05	「天童山再登記」(上)	草宣
		07	同上 (中)	草宣
		08	同上 (下)	草宣
		09	「天童より阿育王へ来り圓英法師に会す (上)」	草宣
		12	「南京より」	草宣
		13	「天童より阿育王へ」(下)	草宣
		14	「汪兆銘院長と会見す」	草宣
		16	「太虚法師を問う」	草宣
		26	「再び上海に戻りて」	草宣
	11	06	「鈴木大拙博士の『支那仏教印象記』」(上)	草宣
		09	同上 (下)	草宣
1935	08	01	「昭和十年訪華団批判 (上)—禿氏・林・大西諸羅漢に呈す—」	草宣
		02	同上 (下)	草宣
		09	「訪華団批判を読みて (上)」	井上隆森
		10	同上 (中)	井上隆森
		11	同上 (下)	井上隆森
	10	05	「支那仏教会の危機来る (上)—大醒法師決起す—」	草宣
		06	同上 (下)	草宣
	11	26	「転換期に臨める台湾佛教の現状」(一)	草宣
		27	同上 (二)	草宣
		28	同上 (三)	草宣
	12	17	「日華佛教の一奇譚 (上) 広東にて」	草宣
		18	同上 (中)	草宣

		19	同上 (下)	草宣
1936	01	14	「福州に友を弔う」	草宣
		16	「黄檗行前記 (上)」	草宣
		17	同上 (中)	草宣
		18	同上 (下)	草宣
	02	19	「海外に発つ人・帰った人仏教・文化両使節の話題上海の基督教青年会が日華学生親善会館建設仏教徒は刺激されねばならん仏教使節藤井草宣氏帰朝談」	不明
		23	「ラトビア僧引見記 (上) 上海にて」	草宣
		25	同上 (中)	草宣
		26	同上 (下)	草宣
	06	12	「日華仏教関係に政治的背景なし」(上)	草宣
		13	同上 (中)	草宣
		14	同上 (下)	草宣
	09	29	「抗日戦線に中国僧の参加太虚, 圓英両氏提携し熾烈極まる抗日運動暴露示された実証の数々仏教徒を唖然たらしむ全支にバラ撒いた小冊子, 激越な言辞で煽る排日まことに遺憾だ冷静に対策考究が必要」	浅野研真
	10	02	「汎太仏青大会と満州・支那 (上)—久保田, 半谷両兄に—」	草宣
		04	同上 (下)	草宣
		08	「中国僧の抗日参加は大勢に順応か最近帰朝の某氏語る」	不明
	12	12	「日華佛教学会藤井草宣氏により豊橋へ移転かきのう理事会で協議」	不明
1937	06	03	「藤井草宣氏近く渡支」	不明
	07	29	「豊台の第一線を突破して禍乱の北平一番乗り記 (A)」	草宣
		30	同上 (B)	草宣
		31	同上 (C)	草宣
	08	18	「北平の藤井氏重要任務に活躍」	不明
1938	05	04	「北京の初夏」	草宣
	08	13	「東亜和平建設に献身留学僧大量養成の機関東本願寺が北京に建設指導に当たる藤井草宣氏」	不明
	10	29	「各層を対象に文化工作の新展開北・中支に亘って藤井静宣氏抱負を実現」	不明
	11	12	「いよいよ看板上がる妙心寺北京別院藤井草宣氏が保証人」	不明
		16	「王一亭氏逝く—蔣介石も心服藤井静宣氏談」	草宣
	12	27	「南京特信 (上) 事変下の蘇州・南京に支那僧の消息を探る」	草宣
		28	同上 (下)	草宣
1939	05	13	「竹津開教監督輔け中南支開教に活動南京を本拠として大派藤井草宣氏近く赴任」	不明
	07	18	「満支の大都市 (上) 在南京」	草宣
		19	同上 (下)	草宣
	08	08	「日支仏教交渉上価値ある武昌聞賢の質問 (上) 在南京」	草宣
		09	同上 (下)	草宣
	12	20	南京便り	安藤廣爾
1940	01	27	「大陸宗教工作 (上)(宗教的「日華」「合作」の貧困)」	草宣
		28	同上 (下)	草宣
	11	03	「新中央政府外交部長緒民誼氏の護法南京」	草宣
			明治節・この月, 石川舜台への言及多数	暁烏敏ら
	12	13	「仁山法師の南京講経日華佛教連盟南京総会理事長 (一)」	草宣

		14	同上 (二)	草宣
		15	同上 (三)	草宣
1941	07	12	「中国僧に日語教授日華親善に藤井静宣氏」	不明
		23	「国民政府に宗教特官設置中支佛教大会決議実現を藤井草宣氏, 楮大使に懇請」	不明
1942	01	18	「中国仏教会復活へ緒民誼氏の要望で藤井静宣氏らが準備」	不明
	07	23	「米英権益処理と宗教及び思想工作」	草宣

註

(1) 本文中歴史的用語として「支那」「満州」を使用することをあらかじめお断りいたします。

(2) たとえば槻木瑞生 1993「日本の開教活動とアジア認識——中外日報のアジア関係記事から」木場明志・槻木瑞生・小島勝「真宗によるアジア開教・教育事業記事の集成」『大谷大学真宗総合研究所研究所紀要　第 12 号』(大谷大学真宗総合研究所) 所収

(3) 藤井草宣「支那, 満州の僧侶のため奉天に仏教中学を設けよ」『中外日報』(19331021)

(4) 前掲藤井,『中外日報』(19331021)

(5) 前掲藤井,『中外日報』(19331021)

(6) 伝統仏教の海外布教そのものについても同様のことがいえる。日本人居留民を対象として活動し, 現地人への働きかけに積極的でなかった伝統仏教の傾向を指し, 木場明志は「追教」と呼んでいる。(木場明志 1990「東本願寺中国布教における教育事業」『真宗研究』34)

(7) 伊藤朝子「暁烏氏と草宣氏にお会いして」上『中外日報』(以下『中外』と略) (19220429)

(8) 藤井草宣「私の心境 (日野, 西田, 倉田, 岡田諸氏に教えを乞う)」上・下『中外』(19220127-31) なお人名はそれぞれ日野真澄, 西田天香, 倉田百三, 岡田播陽を指す

(9) 藤井「原告とその弟子, 天香氏が裁判になるまで　一燈園の破裂」一～三『中外』(19221110-16-18)

(10) 藤井「古くさい慈善遊びをした九條武子さんへ注告する」『中外』(19221108)

(11) 藤井「明治仏教秘史　露西亜布教の手先きに西蔵蒙古の仏教を使ひ支那王室を乗りとる算段——今一息で事瓦解　見真大師号下賜の秘史　石川舜台追懐録」上・中・下「明治仏教秘史　朝鮮へ幽霊退治に行く話　石川舜台追懐録」『中外』(19230321-22-24-25)

(12) 小栗栖香頂が中国へ渡ったのは 1873 年。1876 年に東本願寺上海別院が創立される。中国での香頂の活動については, 陳継東の一連の研究に詳しい

(13) 真宗大谷派と縁戚にある女性を中国皇帝に嫁がせるといった企画が真剣に検討されたという。(前掲藤井『中外』(19230321-22-24-25))

(14) 大アジア主義あるいはアジア主義については様々に議論がなされているが (最近のものでは末木文美士 2001「「連帯」か「侵略」か——大川周明と日本のアジア主義」末木文美士・中島隆博編『非・西欧の視座』大明堂), 仏教大アジア主義に関してはあまりまとまった論考は見受けられない。

(15) 森龍吉編 1975『真宗資料集成 12 真宗教団の近代化』および 1977『真宗資料集成 13 真宗思想の近代化』(同朋社)

(16) 例えば藤井「雑苦罵乱　(三) 宗門とご宗議解散方法」『中外』(19230421),「法城を破る人々 (一)」『中外』(19230821),「銭呉れ本願寺　石川舜台翁談」『中外』(19231106)。なお 1927 年に出版された『明治維新神佛分離史料』中 (東方書院) に収録されている舜台の談話も藤井の記録によるものであると推察される。

(17) 藤井 1933「石川舜台を想ふ」『現代佛教』10 巻 105 号 (7 月)

(18) 前掲藤井 [1933]

(19) 藤井「社旗を背にして　焼け野の原を歩く」『中外』(19230913)
(20) 藤井 1925「大禍難により大解決を得よ」『佛教日本の自覚』(1927・甲子社書房)
(21) 前掲藤井［1925］
(22) 藤井「回想の水野老師」松田江畔編『水野梅暁追懐録』(1974・自費出版)，横田豊 1990「関東大震災下の中国人虐殺事件の告発」『青山学院大学文学部紀要』32
(23) ドイツ留学経験を持ち，帰国後は仏教復興を目的とした新戒律運動に身を投じた・社会事業への関心も高く，とりわけ労働問題に携わって活動するところが大きかった
(24) 前掲藤井「回想の水野老師」
(25) 大谷光瑞の感化を受け浄土真宗本願寺派に転籍したともいわれている
(26) 水野 1931「平和運動より見たる日華佛徒の提携」『現代佛教』8巻81号
(27) 前掲水野［1931］
(28) 前掲水野［1931］
(29) 前掲水野［1931］
(30) 財団法人霞山会編『東亜同文書院大学史』pp.376-377（1982・滬友会）
(31) 水野は頭山満などと共に孫文の葬儀にも招待されている。なお孫文と水野の関係については柴田幹夫 1997「孫文と大谷光瑞」『孫文研究』21 を参照されたい。
(32) 田中清「水野梅暁氏追憶記」前掲『水野梅暁追懐録』pp.56-68 所収
(33) 中村義 1986「水野梅暁在清日記」『辛亥革命研究』6
(34) 海原宏文「水野梅暁氏と私」前掲『水野梅暁追懐録』pp.31-48
(35) 藤井「大連市外星ヶ浦に前執政段祺瑞氏を訪ふ　大連にて」上・中・下『中外』(19270604,05,07)
(36) 藤井「人材編・支那時報社社長　水野梅暁」前掲『仏教日本の自覚』pp.116−122
(37) 水野「時事評論」1924『支那時報』1巻1号
(38) 佛教連合会編『東亜佛教大会紀要』(1926・佛教連合会)
(39) 前掲『東亜佛教大会紀要』p.33
(40) 草宣「北京に勃興せる三時学会を観る　三時学会に宿りて」(一)～(四)『中外』(19270625,26,28,30)
(41) 藤井「鉄鋼の上海に勇躍せる太虚法師の一派」(一)＝(五)『中外』(19270710,12,13,14,15)
(42) 前掲藤井『佛教日本の自覚』p.201 書き込み
(43) 藤井 1931「上海便り」『現代仏教』8巻84号
(44) 『迫害』跋文参照
(45) 藤井「此際日支佛教提携し和平運動を誘発せよ」(上・中・下)『中外』(19320215,17)
(46) 『中外日報』社説（1932/01/30）
(47) 藤井「此際日支佛教提携し和平運動を誘発せよ」(上・中・下)『中外』(19320215,17)
(48) 前掲藤井「此際日支佛教提携し和平運動を誘発せよ」
(49) 藤井 1936「支那佛教徒の對日態度に就いて」『海外佛教事情』3巻10号
(50) 前掲藤井「支那佛教徒の對日態度に就いて」
(51) 藤井 1934「現下の支那仏教界の情勢」『海外佛教事情』1巻2号
(52) 藤井 1936「福建佛教の新舊両派」『海外佛教事情』3巻5号
(53) 藤井「騙術・武力・実力（上・中・下)」『中外』(19320130,31,0201)
(54) 前掲藤井「現下の支那佛教界の情勢」

Portrait of a Wartime Missionary

Shinobu TSUZIMURA

Until 1945, missionaries from traditional Japanese Buddhist sects were sent to proselytize in China, other East Asian countries, Europe and the United States. This article is concerned with the activities of Fujii Sōsen (1896–1971), a Shinshu priest of the Ōtani sect, who pursued missionary work in China during the Sino-Japanese War. Though he was a religious missionary, he was not personally concerned with gaining converts to his faith. Rather, his declared mission was to "modernize" Chinese Buddhism. To accomplish this task, Fujii undertook varied and seemingly contradictory activities. He persuaded Japanese Buddhist organizations to aid their Chinese counterparts, openly criticized Japan, was publicly opposed to the war, and yet at times cooperated with the invading Japanese military forces. He was finally arrested by the Japanese army for spreading "propaganda." How can his faith and mission be explained?

His distinctive ideas about missionary work derived from his conviction that both Japanese and Chinese Buddhism were to be modernized in the same way. According to Fujii, both Buddhist traditions shared a single future and destiny, which was to be led by Japanese example. Both traditions were to undergo reform in the spheres of Buddhist studies, Buddhist education, economic activities, and social welfare, all of which were considered by Fujii to be important to modern institutions.

This paper traces his way of thinking, and is an attempt to illuminate one aspect of the history of Japanese missionary work.